

春採湖の湖底地形

角田 富男

釧路市街地のなかに春採湖はるとろと呼ばれる周囲五・一km、長さ一・七km、最大幅三〇〇m、面積が約〇・四km²の小さな細長い海跡湖がある。この湖は中々底層に多量の硫化水素を溶存した無酸素層を形成している特異な湖沼として、陸水学会では古くから知られてきた。また天然記念物「ヒブナ」の生息している湖水としても著名である。

昭和六〇年に釧路市が春採湖の総合調査を計画したが、その一環として水深調査の依頼を水試が受けたので測深を実施した。その結果を過去と比較してみたら興味ある変遷が認められたので紹介します。

今回の調査は昭和六〇年六月一九日に音響測深機を用いて湖内全域に設定した定線（延一〇・七二km）について連続的に測深した。また細部の補足調査としてレッド測深も後日一部水域について行った。別図のVがその調査結果から求めた等深線図である。

現在の春採湖の最大水深域（湖心）は博物館の南西地点で五・八m、平均水深は一・七mである。そのなかで博物館下から東半分の

水域は二m未満の極浅い水域となっている。科学館下からチャランケチャシ跡の沖にかけては最大水深一・九五mの浅い湖盆状を形成している。これに対し博物館下から西半分の水域は深く三m以深域が過半であり、岸深で湖底はほぼ平坦な地形となっている。

当湖は古くは昭和一三年に測深しているが以後四六年までに三回、そして今回と計五回の調査を実施したことになる。同一湖沼についてこのように断続的に何度も調査している湖沼は少ないものと思われる。今回の調査結果を過去の資料と比較すると以下のとおりである。

図のI~Vまでをみると昭和一三年当時の湖心は科学館下の岬沖にあたり水深九mであった。二八年調査時には湖岸の地形は埋立等によって大分変り湖水面積も小さくなっていったが、湖央の水深は二八年当時とほぼ同様で六〜七m以深の深い水域がチャランケチャシ跡沖から博物館下の南西まで細長く帯状に広がっている。それが三七年になると湖底地形は著しく変化し、湖心域は博物館の南西に

移り水深も六・六mとなって最大水深としては二m以上も浅くなった。特に博物館下から東半分の水域は極めて浅くなり、地点によっては五mから七mも埋った。二八年まで帯状につながっていた深い水域は科学館下で二分され、東部に最深二・九mの湖盆が形成されるようになった。この原因については種々考えられるが、当時は炭鉱の洗炭廃水が東部奥から流入しており、その廃水の沈澱物による埋積の影響が最も大きかったものであろうとみられる。

昭和四六年では三七年当時と比較して基本的な差異は小さく、湖心域が〇・五m浅くなっている程度である。ただし博物館下では二m前後浅くなっており、これはその東側から埋まってきた影響がこの付近まで及んできたものと考えられる。今回の調査では湖心（やや東に移動しているが）で〇・四m浅くなった。また東部の湖盆では一mも浅くなっており、東端の湾入域では〇・五m以浅が拡がり〇・三m前後の水域も多い。

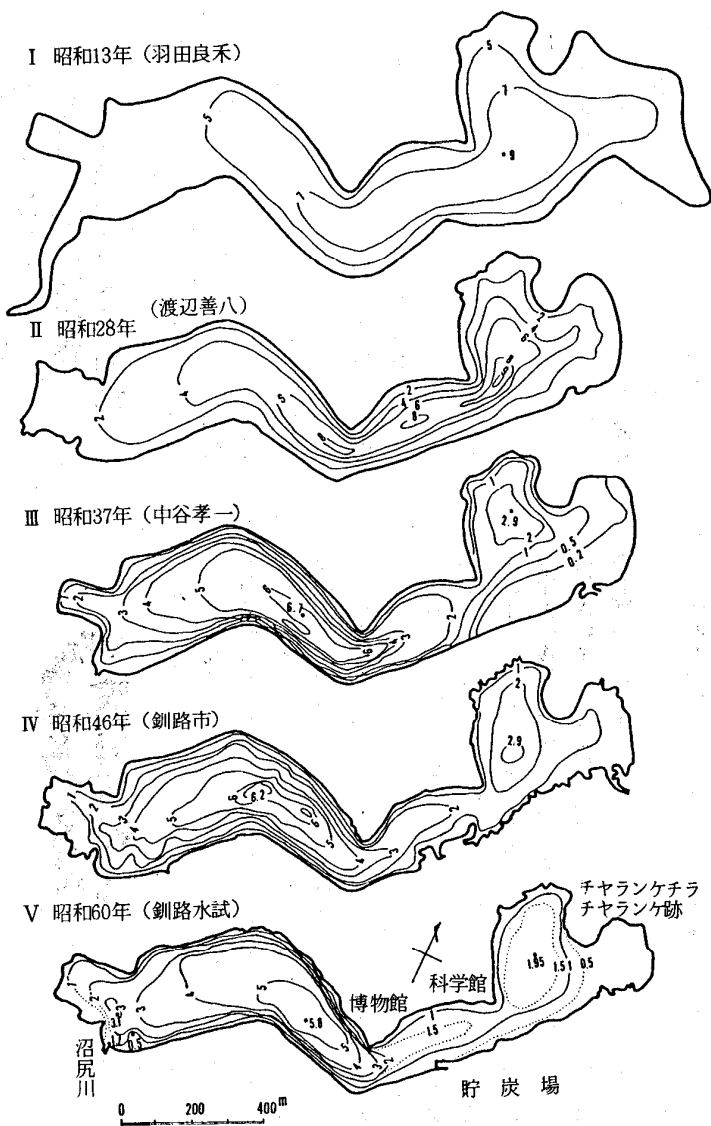
もともと湖沼は地震や噴火等による地殻変動がなければ、長年月の間には流入河川からの沈澱物等により埋積されて徐々に浅くなり末期には湿原さらに陸地化してしまうものである。しかしながらこの春採湖の如く極短期間にこのような変化を示した湖沼も少ないのではないかと思われる。前述のとおり昭和三

○年代には洗炭廃水の「沈澱池」の役割を担った時期があり、それによる埋積が大きかったのは当然な結果と推察されるが、洗炭廃水の流入の無くなった四〇年代以降も徐々にではあるが浅くなる傾向が進行している。これは春採湖の周囲の丘陵がすべて宅地化され、懸濁物を多量に含んだ都市排水の流入が増大してきたこと等も大きな要因となっているも

のと考える。下水等の流入に伴って湖水が富栄養化され、夏季における水草の多大な繁茂も近年問題となってきたが、その水草の枯死による堆積も少なからずのものがある。現在釧路市では下水道の整備事業を推進しており、数年後には春採湖に流入する都市下水はなくなつて湧水等自然水の流入のみとなる(ただし大潮期の満潮時等に湖尻から一部

海水の逆流がある)。今後はこれ迄のような大きな湖底地形の変化はみられなくなるものと推定されるが、さらにどのような変遷をたどるものか興味はつきず、断続的な調査をおして見守っていきたい。

(かくだとみお 増殖部)



春採湖の水深の変遷図